

単元名 世界の国から「あけましておめでとう」番外編 ～マレーシアから学ぶ異なる文化のおもしろさ～

氏名: 廣川 貴志

学校名: 旭川市立近文第一小学校

担当教科: フリー

実践教科: 総合的な学習の時間

時間数: 4時間

対象学年: 5年生

人数: 33人

学習領域

	1	2	3	4	関連するSDGs
A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生		11 住み続けられるまちづくりを
B グローバル社会	相互依存	情報化			
C 地球的課題	人権	環境	平和	開発	12 つくる責任 つかう責任
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加		

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

単元のテーマ

マレーシアの文化や生活などに興味・関心をもち、日本との共通点や相違点について考えることで、異なる文化のおもしろさを知る。

単元の目標

【関心・意欲・態度】 マレーシアの文化や生活などに関心をもち、意欲的にクイズやパズル、すごろくに取り組もうとする。

【技能】 マレー語を使ってコミュニケーションをしながらゲームを楽しむことができる。

【知識・理解】 マレーシアの文化や生活などを知り、日本との共通点や相違点について考えることができる。

【2】 単元の評価 規準	(ア) 関心・意欲・態度	マレーシアの文化や生活などに関心をもち、意欲的にクイズやすごろく、に取り組もうとすることができたか。
	(イ) 技能	マレー語を使ってコミュニケーションをしながらゲームを楽しむことができたか。
	(ウ) 知識・理解	マレーシアの文化や生活などを知り、日本との共通点や相違点について考えることができたか。
【3】 単元設定の理由	<p>本校児童は、4年生のときに総合的な学習の時間で国際理解についての学習をしている。その際、日本、韓国、中国のお正月の文化について調べ、それぞれの国の共通点や相違点を見つけ、異文化に対する理解を深めてきた。また、海外へ旅行したことがある児童がいたり、様々なメディアを通して外国のスポーツを見ている児童がいたりするなど、多くの児童が外国に興味をもっている。</p> <p>本単元では、既習である東アジアからさらに視野を広げ、マレーシアに目を向けさせることで、より多くの共通点や相違点に触れさせたい。その中で、「違いに気付く」「違っていても面白い」ということを様々な教材やアクティビティを通して味わい、異文化理解の素地を養っていくことをねらいとし、本単元を設定した。</p>	
✓ 児童/生徒観 ✓ 教材観 ✓ 指導観		

【4】展開計画（全4時間）			
時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	マレーシアってどんな国？ ・クイズや写真・動画を通してマレーシアに興味をもたせる。	アクティビティ：クイズ ①マレーシアってどこ？（地図上の位置） ②どっちが広い？（面積） ③人口はどっちが多い？（人口） ④マレーシアのお金って何？（通貨） ⑤マレーシアの言葉は何？（言語）	・写真 ・動画 ・パワーポイント ・ワークシート ・RM（リンギット） 模造紙幣
2 本 時	すごろくで旅するマレーシア ・すごろくを楽しみながら、マレー語やマレーシアの文化に親しませる。	アクティビティ：すごろく あいさつ「こんにちは」「私の名前は～」 「元気ですか？」「元気です！」 お 金「リンギット」 RM50 RM20 RM10 RM5 RM1 イベント「ランチタイム」選択肢6つ ・ナシゴレン・ナシルマ・ミーゴレン ・サテ・タパイ・サゴ虫 「お買い物タイム」選択肢6つ ・ドリアン・ランブータン・ロブスター ・セパタクロールボール・竹笛・コースター 「観光・体験」選択肢6つ ・フローティングモスク ・サバミュージアム ・マングローブ植樹・テングザルツアー ・ゴムの樹液採取・ホームステイ	・パワーポイント ・すごろく ・ワークシート ・セパタクロール ボール ・竹笛 ・コースター
3	マレーシア？日本？さあ、どっち？ ・エピソードカードの弁別（マレーシア、日本、両方）を通してマレーシアと日本の共通点や相違点に関心をもたせる。	アクティビティ：エピソードカード マレーシア ・体育の授業は全て外で行います。 ・学校は午前中で終わります。 ・1月から新年度が始まります。 ・試験の結果で次の学年のクラスが決まります。 日本 ・8時までに登校します。 ・義務教育は9年間です。 ・書写（毛筆）の授業があります。 ・雪が降る地域があります。 両方 ・コンビニでおでんが売っています。 ・日本車がたくさん走っています。 ・ワンピースがテレビで放送されています。 ・トイレのあとお尻を水で洗います。	・パワーポイント ・カード ・ワークシート
4	マレーシアの生活を写真で見よう ・フォトランゲージを通して、マレーシアと日本の共通点や相違点について考えさせる。	アクティビティ：フォトランゲージ ①マレーシアの市場 ②マレーシアの家 ③マレーシアの自然 ④マレーシアの踊り ⑤マレーシアの学校 ⑥マレーシアの食べ物	・パワーポイント ・写真 ・ワークシート

【授業実践の様子】（本時での写真を添付し、キャプションをつけて下さい）



拡大版すごろくを黒板に貼ってルールの説明



RM（リングット）模造紙幣を配って準備



辞書を重ねて机の段差を解消するナイスアイデア



イベントタイムで得たタックシールを貼る



すごろくに登場したものを実際に見せて説明



児童がセパタクローのボールでヘディングに挑戦



本物の RM（リングット）紙幣を触ってみる



調理されたサゴ虫を画像で紹介

【6】本時のふり返り

子どもたちの反応は予想以上によいもので、楽しみながら学習を進めることができた。ただ、「楽しむだけで終わりの授業」「アクティビティありき（だけ）の授業」にならないよう、授業の中で「伝えたいこと」「考えさせたいこと」などのねらいから逸らさないよう気を付けた。

想定していたことではあったが、すごろくが盛り上がれば盛り上がるほど、時間が足りなくなってしまう。すごろくで遊ぶ時間を確保するため、序盤の説明はなるべくコンパクトにする必要があった。また、すごろくの後のふり返りで使う写真もより精選すればよかった。

実際に子どもたちがやることですごろくのルール上の問題点も浮かび上がってきたので、よりねらいに即した活動になるようブラッシュアップし、さらに楽しく学べる教材にしていきたい。また、今後はどの学年でも使える工夫を考えていきたい。

【7】単元を通じた児童生徒の反応/変化

	(授業前)	(授業後)
児童 A	マレーシアは日本からすごく遠い国だと思っていた。	マレーシアは自然が豊かだと思った。マレーシアは、意外と近いことがわかった。マレーシアの国旗の意味を知って、他の国の国旗も調べてみたくなった。
児童 B	マレーシアは名前しか知らない国だった。	マレーシアは大きく二つに分かれていて、間にブルネイやシンガポールがあることがわかった。蛇口から出る水がどういう風に来ているのかもっと知りたいと思った。食べ物もいろいろあったけど、サゴ虫は食べたくないと思った。
児童 C	マレーシアは、おしゃれな場所が多くて、人が多そうなイメージだった。あと暑そうだと思っていた。	マレーシアは季節がずっと夏など日本と違うことやみんなスマホを持っているなど同じところもあることがわかった。日本にもあるお店がたくさんあることがわかった。
児童 D	マレーシアのことは何となく聞いたことがある程度だった。	マレーシアのお金のことを聞いて、1RM（リンギット）＝約28円だとわかり、他の国のお金のことでも知りたくなった。
児童 E	マレーシアは、全くイメージがつかない国だった。	いろいろな写真を見て、結構都会だと思った。スマホがあるとは思わなかった。マレー語は思ったより難しくなかったのもっとマレー語のことを知りたいと思った。
児童 F	マレーシアのことは想像もつかなかった。	日本のテレビがやっていたり、日本車が走っていたりするのでマレーシアに行ってみたくと思った。私は、自分が住んでいる国なのに日本のことをまだまだ知らないから、日本についても調べてみたくなった。

【8】自己評価	
1. 苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・伝えたいことが多くなりすぎて45分で収まりきらないことが多かった。 ・意図をもって写真や動画を撮ったつもりでいたが、実際に授業レベルで考えてみるとほしい写真が無いということが多々あった。(写真、動画の共有にはとても助けられた)
2. 改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・すぐろくの「めぐり」は付箋を使うなどして、スムーズに剥がすことができるような工夫が必要。 ・児童機の段差があるとボードが安定しないので、特別教室を使うなどして、段差のない環境にしておくとうい。 ・すぐろく終了時、タックシールが0枚という児童が複数名いた。「イベントタイムのマスに止まったら」ではなく、「イベントタイムのマスを通したら」という条件にした方がより楽しめる展開にできる。通過したら→タックシール1枚、止まったら→タックシール2枚など、差を付けるとなおよい。
3. 成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・すぐろくのルールは児童の実態に合わせてかなり簡略化を図ったが、それでも十分に楽しみながら取り組む様子が見られた。 ・本物のRM（リングット）紙幣やセパタクローのボールなど、実際に手に取って見られる物を用意したことで、より興味をもって取り組ませることができた。 ・すぐろくの中でマレー語を使う場面を多く設定したことで、その後の授業や学校生活の中でも積極的にマレー語を使おうとする姿が見られるようになった。
4. 備考（授業者による自由記述）	<p>「“教材として”ではなく、“すぐろくとして” おもしろいものにしたい」「すぐろく自体の精度やゲーム性を高めたい」という強い思いをもって教材づくりに臨んできた。もちろん、教材の質や程度が授業の成否に直結するわけではないが、妥協をしたり、中途半端なものを作ったりしていい理由にはならない。結果的にどのような教材を作っても子どもたちは珍しさから食い付いてくると思われるため、その点には十分留意する必要がある。</p>

参考資料：

- ・2016年度教師海外研修（北海道地域）実践報告集（JICA 北海道）
- ・ひとり歩きの会話集「マレーシア語」（JTB パブリッシング）
- ・旅の指さし会話帳「マレーシア」（情報センター出版局）
- ・私たちが目指す世界（公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン）

添付資料：

- ・ワークシート4枚
- ・すぐろく（ボード1枚、イベントカード3枚）